

特集

島への定住と起業・IV



これまで本特集では、地元住民の方々や行政担当者など、受け入れ側からみた定住者像や今後の期待についても紹介してきた。Uターンが島で活躍し、定着していくために、島側に求められる受け入れ態勢や心構えとはどういうものなのか。今回はまず、故郷の再生に向け、飽くなき挑戦をつづけるトップランナーとして、離島のみならず全国的にも知られている島根県海士町の山内道雄町長にお話をいただいた。

同町は現在、二三〇〇人ほどの住民の約一割が若いUターンで、国内のみならず外国からの定住者もみられ、島の方々とともに起業を果たした人たちもいる。

「人が人を呼ぶ」好循環がいかにしてできあがっていったのか、その鍵は積極的な《交流》にあるという。若者たちは何を求めて島へやってくるのか、彼らが地域にもたらした変化などについても、示唆に富むご意見をいただいた。これらのなかに定住施策展開の大きなヒントが隠されている。

近年、地域おこし協力隊の任期終了後の定住に

おいて、起業や、地元企業・団体への就業などとともに、《けいぎょう継業》もひとつの選択肢になってきている。継業とは、後継者がおらず、近い将来には途絶えてしまいかねない生業や、ものづくりを継承していくこと。これがスムーズに行われることで、伝統や技が後世に引き継がれ、島の生活環境維持や向上にもつながっていく。

今号では、イルカウォッチングで生計を立てるUターン男性、Uターンで人が集うゲストハウスを開業した女性や島人のためのカフェを開店した女性、家業を継ぐためUターンした畜産農家の方々、地場食材を使ったレストランを経営し自ら畑も耕すUターン男性とUターンご夫婦、憧れの島暮らしを実現させ農漁業に従事するUターンご夫婦にその背景や思いを語っていただいた。皆さんの暮らしぶりや仕事に対する考え方、将来ビジョンをみていくと、これまで島々が守り続けてきた環境や文化、暮らし方を受け継ごうとする姿勢が通底しており、これらも広い意味での《継業》といえるのではないだろうか。

特集インタビュー

- ★《交流》こそが定住促進の鍵 18
島に変化をもたらす《活力人口》
島根県海士町長 山内道雄
- ①心の声に導かれ、イルカ船の船長に 22
(東京都御蔵島村・御蔵島)
イルカウォッチング船「海豚丸」船長・ネイチャーガイド/
Iターン 加藤啓司
- ②ゆっくり着実に、人と人との結び目づくりを 27
(新潟県粟島浦村・粟島)
ゲストハウス「おもすびのいえ」オーナー/
Iターン 青柳花子
- ③島人もくつろげる喫茶空間を運営 31
(岡山県岡山市・犬島)
カフェ「simasima」オーナー/Iターン 垣本早智
- ④[レポート] 和牛生産を担うUターン青年たち 36
(長崎県平戸市・的山大島)
平戸市大島支所地域振興課長 工藤大介
- ⑤[レポート]《食》と《農》——人が集う場所づくり 40
(長崎県五島市・福江島)
ライター 竹内 章
- ⑥島人に支えられ、漁と農を夫婦で兼業 48
(鹿児島県十島村・悪石島)
農漁業/Iターン 鎌倉秀成・今日子



《交流》こそが定住促進の鍵

島に変化をもたらす《活力人口》



島根県海士町長 山内 道雄

単独町制を選択、「自立・挑戦・交流」を指針に、行財政改革をはじめ、地域資源を生かした産業おこしや未来を支える人づくりで島の創生に挑みつづける島根県海士町。生き残り方策の一つとして、交流による定住促進を掲げる山内道雄町長に、取り組みの現状と展望について語っていただいた。

昭和13年中ノ島（旧海士村）生まれ。日本電信電話公社、NTT勤務を経て、平成5年に第三セクター（株）海士総支配人に。同7年に海士町議会議員、同議長を経て、同14年海士町長に就任。現在4期目。

活躍するステージを求めて来島する若者

これまで、海士町には五六六人の若いイターンが来られ、定着率は約五割ほどになっています（平成一六―一八年度の実績）。転勤族や島前高校生は含んでいません。町の人口が二三〇〇人ほどなので、一割強がイターンになります。移住対策は、平成一〇年ごろから取り組み始めました。地域資源を活かし、第一次産業を再生することで島に産業を創り、雇用の場を増やす。そして、外貨を獲得して活性化につなげる。「成長を生み出す力を島の外に求める」戦略です。

町が「やる気のある若者」を求めていたところに、四十歳代以下の高学歴で高いキャリアとスキル、志を持ち合わせたイターンが集まってきたように思います。若者たちの活躍が、次の優秀な人たちを呼び込む。人が人を呼ぶ、これこそが海士の大きな特徴と言えるでしょう。

彼らはなぜ、海士へやって来たのか。理由を尋ねると、「島には宝物があるから」「この町は信頼できると思ったから」といった答えが返ってきます。なかには、学生時代に海士を訪れた際、「この島は何か面白そうだ」と感じ「いま宝ものを探しているところ」と話す人もいます。

日頃から、「本気で頑張る人には、活躍できるステージ

を用意してあげねば」と話しています。行政には、チャレンジを受け入れ、チャンスを与えるだけの度量が求められる。その覚悟と決断に責任を持つのが、私の役目だと思っています。

海士町には、移住に対する特別な優遇制度はありません。定住用の住宅を一九九戸（平成二八年度現在）建てているほか、出産祝い金や第三子以降の保育料の無料化など、少子化対策の制度があるくらいです。

海士町にやって来る若いイターンには、優遇制度は無用です。彼らは一攫千金の夢を抱いているわけではなく、自らが活躍するステージを求めて、地道に仕事をつくりにやってくる。必要なのはこのマインドに応えようという姿勢です。実際、移住者は独力でチャレンジする人が多く、そのやる気を下支えしたり、コミュニティにうまく溶け込めるようケアすることのほうが大切です。

島内外で活躍するイターンたち

イターンによる起業法人化は、七例ほどあります。地元の漁師と生産協業組合を立ち上げ、イワガキの養殖に取り組み始めた鈴木和弘・恵津子夫妻はその代表格です。彼らのイワガキ「春香」は、東京の築地市場や飲食店に出荷され、いまや島の特産物として欠かすことができないものに。

「いわがき生産株式会社」設立（平成一八年）の際には、和弘さんが取締役に就任しました。二人はイターンの先頭バッターとして、後輩たちのまとめ役、地元住民とのパイプ役を担うなど、大変重要な存在となっています。

漁業者とイターンが新しく事業を起こしたケースは、干しナマコ加工の「株式会社たじまや」もあります。代表取締役で群馬県出身の宮崎雅也君は、大学時代に私たちと出会い、民宿「但馬屋」に半ば押しかける形で「就職」し、農漁業や宿泊業などを学びました。但馬屋では、冬場にナマコの一次加工を行っており、彼はその事業を法人化した形になるのですが、販路は国内に留まらず、中国へも拡大しており、夫婦で環境配慮型の有機農業も営んでいます（本誌二四〇号の特集記事参照）。

イワガキとナマコの加工場は、町で整備しました。個人では大きな投資はできないので、やはり官設民営でないと。



全国ブランドとなった養殖イワガキ「春香」の水揚げ。



干しナマコ加工業をおこした宮崎雅也さん。



「巡りの環」を立ち上げた阿部裕志さん。

官設官営でもダメです。

阿部裕志君は、以前トヨタ自動車でエンジニアをしていたのですが、私たちと出会って海士に移住し、「株式会社巡りの環」を立ち上げました。島を学びの場とした企業研修や農作物の販売などで、島を持続的な地域の未来モデルとすべく、活性化に取り組んでくれています（本誌二四四号の特集記事参照）。

起業ではありませんが、水産加工グループの「海の駅松島」も面白い。島産の「海士乃塩」（天然塩）を使った商品開発や、アカモクなど新鮮な魚介藻類を使った加工

品の製造と販売を行っており、漁協の直販所に出しています。

いま注目しているのは、南端の崎地区さき。雲南市出身の丹後貴視さんと、隠岐島前高校に島留学で入学した娘さんにつられて来られた白石宗久さんが、ミカンづくりをやっています。いろいろ試行錯誤しているようですが、そろそろ出荷できそうだと聞いています。また、観光協会がこの地区に「島食の寺子屋」という料理学校をつくりました。佐藤岳央さん（在サウジアラビア日本国総領事館公邸の元料理人）が、島の素材を使った料理づくりを教えている。崎はいま、もの凄いいことになっています。

移住者は、国内だけにとどまりません。隠岐牛を生産する「有限会社隠岐潮風ファーム」の親会社（有限会社飯古建設）には定置網事業部があり、そのほとんどがインターン。漁労長のアモウさんはミャンマーから来ました。地元の娘さんと結婚したドイツ人のムラーさんは、有機野菜づくりに取り組み、無人のスタンドで直売したりしている。JICAの駐在員もおり、ブータンやアフリカなどからの研修の受け入れ場にもなっています。

「島前高校魅力化プロジェクト」を牽引した岩本悠君（現・島根県教育庁特命官）をはじめ、海士町で培ったノウハウや実績を活かし、島外で活躍している例もあります。スリラ

ンカから来ていたサミラ君は、いま奥出雲町の観光協会
で働いています。

ほかに、隠岐國学習センターの豊田庄吾君や、奥田麻
衣子さんなど教育の現場で頑張っているイターンもいます。

地域に変化をもたらす《活力人口》

イターンと住民の方々との軋轢は、最初の頃はもちろん
ありましたが、いまでは少なくなりました。イターンの人
たちが住民以上に本気で島のことを考え、粘り強く頑張る
姿勢を見せたことで、見方も変わってきたように思います。
歴史や文化、今日まで受け継がれてきた島の暮らしを大切
にする心を持って、積極的に地域に溶け込む努力が、閉鎖
的だった海士町、地域コミュニティに大きな変化をもた
らしている。

町の総人口は増えていませんが、若い《活力人口》が増
加したことで、人口構成のバランスが良くなり、若者の多
い島と言われるようになりました。三十歳代の女性の増加
率は、過疎指定市町村のなかで第五位にランクインしま
した（一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所「全国持続可能
性市町村リスト&マップ」平成二九年八月）。地元の若者とイタ
ーン、イターン同士でのカップルも誕生し、人と人のつ
ながり「ご縁」から始まった海士町の交流は、「血縁」と

いうより強固な絆へと変化してきている。

子どもも増えていきます。平成二六年度に保育園の定員を
六〇人から八〇人に引き上げました。翌年度には九六人の
入園希望があつて待機児童が出そうになり、施設を増設し
て対応しました。今年度はゼロ歳児が増えたため、託児所
を開設したところです。

町でつくった住宅をいつまでも町で管理するのは不経済
いずれば定住者に譲るような仕組みにしたい。空き家を町
でリニューアルして希望者に貸し出す制度もあり、一〇年
たったら家主に返すことになっています。ただ、ほとんどの
家主がそのまま使つてほしい、と言われます。

挑戦し続ける島へ

活性化の源は《交流》です。外からイターンという、異
質を取り入れ、多様性を持つことで起こる化学反応が、
住民意識の変化や、元気な島づくりにつながっていきます。
行政自体も、予算の消化型から、「稼ぐ行政」への転換が
必要です。

歴史や伝統文化を次世代に引き継ぐために、「ものづく
り」×「ひとづくり」が持続する島をつくる。私の後につ
づく人たちも、若者たちと一緒に、たゆまず挑戦を続けて
ほしいと思っています。